

	<p>エッセイ</p> <p>捨てない理由・捨てる理由</p> <p>SCE・Net 松村 眞</p>	<p>E-63</p> <p>発行日 2014. 5. 10</p>
---	---	--

ときどき時候の挨拶とともに、考えさせられる話題を送ってくる友人がいて、またもや気になる問題を投げかけてきた。付き合いの長い友人だから、私がどんな意見を返すのか面白さ半分、期待半分で打診してきたのであろう。メールによると、古い蔵書を処分したいのだが、捨てる本と残す本の選別が悩ましいとのこと。蔵書の始末は、高齢者の世代に共通の課題であろう。エンジニアの場合は、実務に多くの専門書が必要なため、仕事を始めた 20 代から参考書や便覧などを自前で買ってきた。まだ給料が少ない頃は、安くはない書籍代が負担だったが、将来の自分への投資だと思っていた。購入した書籍はオフィスのデスクやキャビネに常駐し、日々の仕事を助けてくれた。自宅の書架にも並び、レポートや論文を書くときに使っていた。

こうした専門書は、現役を退いてから 10 年以上も経つのに容易に捨てられない。友人のメールにも、表紙も中身もボロボロになっていて、もう 2 度と開けて見ることもないだろうが、ポイと捨てることには抵抗があると書かれている。専門書ばかりではない。私の場合は学生時代に傾倒していた哲学や文学書も残っているし、30 代から 40 代にかけてよく読んだ経済書もある。50 代に関心が深まって読んだマネジメント書は、今も書架の一面を占めている。これら教養書の類も、それぞれに得るところがあったから、また読んでみたい気持ちが残っている。だから友人の蔵書への未練がよくわかり、人ごととは思えない。少しずつでも処分した方がよいと思うのだが、いざ捨てるようになると思い出がよみがえり、整理の手を止めてしまうのだ。メールには、気兼ねなく捨てられるアドバイスが欲しいとある。そこで一晩考えて、自分なりの意見を以降のように整理してみた。私の独断だから、同じ世代の別の人にも意見を聞いてみたい。

私は若い時から本を大切に思い、買った本は滅多に捨てなかった。だから独身寮にいた頃も、5 段の書架 2 本が狭い自室の入り口をふさぎ、その脇をすり抜けて居住空間に出入りしていた。結婚してからも狭いながら常に自室を確保し、家内に文句を言われながら 5 段の書架を 5 本ぐらい置いていた。なにしろ買っても捨てないから増える一方で、引越しのたびに重い段ボール箱を 30 個以上も運び、まるでヤドカリのようだと自嘲していた。では、なぜ本を捨てられないかという、三つの理由があると思う。

第 1 の理由は誰でも口にするように、また読むときや見る機会があるだろうという「再利用」の可能性である。実際に再び見るのは 1 割もないだろうが、この理由はもっともら

しいし、本人しかわからないから他人は反対できない。このため説得力の低い第2・第3の理由の代わりにも使われる。貴重な室内空間を占有することの家人への言い訳だけでなく、自分をも騙して納得させることができるのだ。私はこの理由が正しいかどうか確認するため、物置に5段書架を2本移して、1年にどのくらい見に行くか試してみた。移した書架には、初めからあまり見ないだろうなと思う本を選んだこともあったが、結局、3年間に一度も見に行かなかった。背表紙が見えないから、物置の書籍の存在自体が意識から遠くなったせいもあるかもしれない。でも、見る必要がなかったことは明らかである。

その中に、友人がポイと捨てられないといった多くの専門書が含まれている。専門書は買った時は必要だったけれど、今のライフステージでは不要なことが明らかになったのだ。しかし捨てるのは惜しいので、安くても古本屋に売るか、どこかに寄贈できないか考えた。しかし代表的な数冊を見た古本屋は、元の値段が高くても今は売れないから引き取らないという。古書店がごみとしか評価しない本は、図書館やブックオフだって無料でも容易に引き取らないであろう。陳列するだけでも場所や人手が必要になるからだ。「かつて自分にとって価値があった本」と、「今も他人にとって価値がある本」の間には大きな乖離があると思って間違いない。他人になったつもりで本当に買うだろうか考えてみれば、1割どころかもっとわずかししか再利用のニーズがないことに気がつくであろう。ではライフステージが変わって不要になっているのに、なぜその後も捨てずに残していたかを考えると、次の理由に行き当たる。

第2の理由は懐かしいという「郷愁」である。この本はどうしても必要で買ったけれど、高価だったから食費を削るしかなかったとか、この本は寝不足になるまで夢中で読んでいたなど、過ぎ去った感慨が捨てる抵抗になるのだ。本の内容よりも、その本を手に入れた時の自分の環境が懐かしいのだ。でも懐かしいから捨てないという理由は、本人だけの価値観だから、生活空間を共有している家族には場所ふさぎの迷惑でしかない。本人も自己中心の理由だとわかっているから、また読むことがあるという第1の理由にすり替えるのだ。その結果、再読のニーズを正当化しやすい専門書が多く残り、懐かしくても小説や教養の本は残す割合が低くなる。

第3の理由は、書籍を多くもっている充足感である。知識人の象徴は多くの書架に囲まれた書斎であろう。だから自分も多くの書籍に囲まれ、インテリの自尊心を満足させたいのである。訪問客が書架を眺めて、「ずいぶん沢山の本をお持ちで、よく勉強しておられますね。」と言ってくれば悪い気がしない。有名ブランドのアクセサリを多く持っているのと同じで、自尊心と虚栄心を同時に満たしてくれるのだ。だがモノを多く持つ充足感は、幸せを感じさせる大きな要素だから、否定するつもりは全くない。正直に白状しよう。私もこの自尊心で書籍を増やし、書架に囲まれることでインテリとしてのプライドを

意識していたと思う。書架に並んだ有名な小説家の全集は、美しい装丁と立派な背表紙が、虚栄心を満たすのに一役買っていた。この願望を利用したのが出版社で、半分も読まれないのを知りながら、全集を次々に発刊していた。重要なのは本の内容よりも、名の通った本の背表紙と量だったのである。しかし、自尊心や虚栄心も郷愁と同様に他人には認知されないので、また読むことがあるという第1の理由にすり替える誘惑に駆られるであろう。

次に私が今どうしているかで、この命題を締めくくりにする。自室には5段の書架が4本あり、この量を蔵書の限界にしている。増えてきたら、ときどき見つくろって増えた分に見合う量を捨てる。捨てる優先順位は、二度と読みそうにない本が第1位、図書館でいつでも借りられそうな本が第2位、インターネットで検索すれば得られそうな情報の本が第3位である。その前に電子化媒体で代替できる書籍が先行するので、辞書類はほとんどない。30冊もあった百科事典は、もうとっくに捨ててしまった。書籍とは別に、英会話や音楽などを収録したDVDが百枚以上あったが、今はほとんど残っていない。収録したときは、また見るだろうと思ったが、本と違ってパラパラとめくって見ることができない。だから見ないままキャビネの一面を占めていたが、そううちに段ボール箱に入れて物置に移し、その物置を整理したときに捨ててしまった。

蔵書と同様に必要性が希薄なのに残しているモノに、衣類と食器がある。家内は私の書籍が多いというが、私に言わせればたんすの大部分が家内の古くなった衣類で占有されている。たまに「捨てれば」といえば、また着る機会があると私が専門書を捨てないのと同じ理由で反対する。もうサイズや色が似合わなくなっているのに、買った時の郷愁が大きいから、再利用の可能性を理由に捨てないのではなかろうか。食器の場合はどうか。食器棚の7割は、あまり使わない食器に占められており、高級品は箱に入れたまましまっている。使わなくても処分しない理由は、やはりまた使う機会があると再利用を挙げる。しかし本当は手に入れた時の郷愁と、多くの食器を持っている充足感が大きいからではないだろうか。書籍も衣類も食器も、捨てない理由は再び使うという思い込みと、手に入れた時の郷愁と、保有している充足感の三つに集約できるであろう。

最後に捨てない理由ではなく、捨てる理由を考えてみた。捨てない理由が主に郷愁や充足感だとしても、それが心を豊かにしてくれる側面があるから、他人に迷惑でなければ捨てる必要もないだろう。それでも捨てるとしたら、一つの理由は限られたスペースの有効利用である。もう一つの理由は、本人が別世界に行った後に片付けをする人の負担軽減である。とくに後期高齢者の世代は、この理由で「断捨離」をしてもよいのではないか。

(おわり)